

大宅文庫ニエヌ

(題字 大宅 昌)

第81号

2013年7月15日発行

■

発行所

公益財団法人大宅壮一文庫

理事長 枝廣映子

東京都世田谷区八幡山3-10-20

〒156-0056

電話03-3303-2000

川本 三郎

大宅壮一は変化の激しいジャーナリズムの最前線で生きた人だった。いつも現場に身を置こうとした。

私は一九六九年に朝日新聞社に入社したが、配属は新聞ではなく「週刊朝日」だった。新聞社では新聞の社会部や政治部が中心であり、週刊誌の地位は低かった。週刊誌記者は新聞記者に比べ軽く見られていた。だから「週刊朝日」への配属が決まった時、総務の先輩が「気を落さないように」と励ましてくれたほどだった。

自分では満足はしていたが、それでも社内の格差は気になつた。それに取材に行つても相手に「週刊誌か」と低く見られることが多かつた。週刊誌ジャーナリズムに身を置くことに自己嫌悪を感じることがよくあつた。

そんな時、ひとつ指針になつたのは大宅壮一だった。「週刊朝日」を百万部雑誌にした名編集長の扇谷正造は大宅壮一の弟子に数えられる人だつた。当時、すでに社を離れて

いたがまだ影響力があり、扇谷正造を通して大宅壮一の存在を意識するようになった。

どう意識したか。週刊誌ジャーナリズムの「野次馬」という汚れた体質に身をさらす覚悟といえばいいだろうか。きれいごとはいわない。あくまでも「野次馬」に徹して現場に飛びこんでゆく。

記者になつて二年目、「東京放浪記」という記事を書いた。一ヶ月、ヒッピーのようなく暮しをしてその体験を書く。いわゆる体験ルポ。これは若き日の大宅壮一が、昭和はじめ、タクシーの運転手の助手になつてそのルポを

書いた「円タク助手の一夜」に倣つた。学者や作家には出来ない仕事。まさに地位の低い週刊誌の記者だから出来る仕事だと自負した。

大宅壮一には一度だけ取材でお目にかかることがある。大学紛争が激しくなつた一九六九年、学生たちのあいだに遺稿集がよく読まれた。とくに自殺した学生運動の活動家、奥浩平の『青春の墓標』と、夭折した大宅歩

の『詩と反逆と死』は、当時の学生たちにとつて通過儀礼のような本だつた。

大宅歩は大宅壮一の長男。それでコメントをもらうことにしたのだが、大先輩に会うのは緊張したし、子供を亡くした父親にその死を語つてもらうのは失礼ではないかという思いもあつた。

それでもジャーナリズムの先達は駆け出しの週刊誌記者に快よく会つてくれ、「息子の本はオレの本よりよく売っている」と笑わせながら、若者たちのあいだでなぜ遺稿集が読まれるのか、その時代背景を的確に話してくれた。おかげで記事を書くことが出来た。

翌七〇年に大宅壮一は七十歳で亡くなる。

ということは、あの時の氏はいまの私と同じ年齢になる。それを思うと感無量になる。

大宅壮一は在野のジャーナリストとして生きた。大組織に所属しなかつたし、大学教授になることもなかつた。筆一本で生きた。みごとである。

私も朝日を辞めたあとなんとかフリーで生きている。大先輩の氣概を学びたい。

(評論家)

編集部注・「東京放浪記」は「週刊朝日」一九七〇年十二月四日～十八日号連載の「本誌記者の東京放浪実験」面白くてやがてさびしき二十日間、「円タク助手の一夜」は「新潮」一九二九年十月号に掲載され、「モダン層とモダン相」(大風閣書房・一九三〇年)に収録。「遺稿集」の記事は「死者」に憧れる若ものたち」「週刊朝日」一九六九年五月五日号掲載。

第四十四回 大宅壮一ノンフィクション賞

船橋洋一『カウントダウン・メルトダウン』

本年四月九日、第四十四回大宅壮一ノンフィクション賞選考委員会（公益財團法人日本文学振興会）は、関川夏央、立花隆、西木正明、藤原作弥、柳田邦男の五選考委員（五十音順）のもと、平成二十四年中に刊行された作品および応募原稿の中から、船橋洋一『カウントダウン・メルトダウン』（文藝春秋刊）を受賞作品として決定した。

関川委員は受賞作を「戦史」と評し、「戦争の勝ち負け引き分けの別にかかわらず、『戦史』を書かず『戦史』に学ばない国は滅びる」と述べている。贈呈式は六月二十一日、帝国ホテルで行われた。

受賞作以外の候補作は次の四篇だった。

門田隆将『死の淵を見た男—吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日』（P.H.P研究所刊）、五味洋治『父金正日と私—金正男独占告白』（文藝春秋刊）、森功『なぜ院長は「逃亡犯」にされたのか—見捨てられた原発直下「双葉病院」恐怖の7日間』（講談社刊）、安田浩一『ネットと愛國—在特会の「闇」を追いかけて』（講談社刊）。

大宅壮一ノンフィクション賞受賞の船橋洋一氏に受賞記念エッセイをご寄稿いただいた。

（写真は日本文学振興会のご協力による）

『カウントダウン・メルトダウン』の語り部として 船橋洋一

『カウントダウン・メルトダウン』は、これまで私が手がけてきたノンフィクションとは多くの点で、勝手が違った。

原発と放射能を相手とする以上、科学と技術についてある程度の知識がないと怖くて書けない。なのに、私にはその基礎知識も素養もない。

原子力安全規制官庁の原子力安全・保安院、原子力安全委員会、文部科学省を重要な取材対象としなければならないが、この方面はこれまで取材したことになれば知人もほとんどいない。

まったくに違いない。ここでの経験がなければ、この本は生まれなかつた。

ただ、こうした民間事故調での検証作業を経る過程で、私は事故の因果関係と背景分析もさることながら、危機における人間社会の姿と国家の形に興味を抱くようになつた。当時の菅直人政権が危機のさなかに極秘に作成していた「最悪のシナリオ」に私は引かれた。

私はこのペーパーを二〇一一年末に入手した。それは民間事故調の報告書の巻末に突っ込んだが、内容については最小限の紹介にどめざるをえなかつた。原稿の締め切りが迫っていたこともあつたが、それ以上に誰が、何のために、どのようにして、それを作成したのか、その肝心な点がその時点では取材できていなかつたことが大きい。

報告書を発表した後、私は一記者に戻つて、取材を始めた。最初は、『福島原発事故 最建イニシアティブがプロデュースした福島原発事故独立検証委員会（いわゆる民間事故調）での原発事故の調査・検証作業にプログラム・ディレクターとして参加することがなかつたならば、福島原発事故を取材しようと思ったかどうか疑わしい。仮に取り組んだとしても、とても歯が立たないと途中で投げ出してしまった。



原子力安全規制官庁の原子力安全・保安院、原子力安全委員会、文部科学省を重要な取材対象としなければならないが、この方面はこれまで取材したことになれば知人もほとんどいない。

そのうち、ある筋から「ヨコスカ・ショック」の話を耳にした。あの危機の時、米海軍が日本から撤退を考えていたというではないか：私はワシントンに飛んだ。そこでめぐれてくれたのは、福島原発危機の背後で繰り広げられていたもう一つのドラマ、つまり『福島原発事故 日米同盟危機物語』だった。

民間事故調の検証作業をしながら、どうにももどかしかつたのが、SPEEDIの真実についてだった。菅政権は住民避難に当たって、なぜ、SPEEDIを使わなかつたのか。

二〇一一年三月二三日午後の首相執務室での会議とその前後の場面に、そのカギが隠されているのではないか。その日の朝、原子力安全委員会は、SPEEDIの逆推定による

放射性物質の拡散状況の試算結果を初めて手にした。それを官邸に持ち込んだ時、一体何が起こつたのか。

『福島原発事故 官邸SPEEDI物語』に、私は挑んだ。

ただ、ここでの場面は見るものによって真実が違つて見える『羅生門』の世界にきわどく近づいていく。それぞれの記憶を重ね合わせ、その共通基層をつかみだし、物語を紡ぐ語り部の作業と相成つた。

この本についてある雑誌は『あの危機の国民的叙事詩』と評した。

記憶を漣して真実に昇華させるエッセー（読み）をむしろ人は叙事詩と感じるのか――記者冥利という言葉があるが、私はしばしその感慨に浸つたものである。

二〇一一年三月十一日。マグニチュード九・〇の地震と巨大な一波の津波は福島第一原発の電源を喪失させ、冷却不能となつた原子炉はメルトダウンの危機に直面する。

二号機の格納容器の圧力を下げられず、メルトダウンが避けられなくなつた時、福島第一原発の吉田所長は死を覚悟する。東電の清水正孝社長は現場社員の退避を首相官邸へ要求。ありえない怒る首相は東電本店に乗り込み、対策統合本部を設置する。二号機の深刻な状況が伝えられたころから政府は「最悪のシナリオ」の準備が必要だと感じはじめる。最悪の事態から首相談

話まで用意されたこのシナリオは事故後誰の目にも触れることがなかつた。

「福島原発事故独立検証委員会」（民間事故調）をプロデュースした筆者は、この「最悪のシナリオ」をきっかけに、事故対応にあたつた閣僚、官僚、東電社員、自衛隊員、米軍関係者など、実際に三〇〇人を取材。それらを完全時系列ではなく、時間を巻き戻しては視点を変えて再生する。

常にイライラしている菅直人首相。現場で頑張る吉田昌郎所長。テレビ会議で報告を受けるが事態を好転できない東電本部。東電本店に設置した対策統合本部で日米協議の場の設定に腐心する細野豪志事務局長。その他あの危機に立ち向かつた

略歴（ふなばし よういち）一九四四年北京生まれ。東京大学教養学部卒業。六八年朝日新聞社入社。米ハーバード大学二一メンフェロー、朝日新聞社北京特派員、ワシントン特派員、米国際経済研究所（IIE）客員研究員、九二年慶應義塾大学法学博士。朝日新聞社アメリカ総局長、コラムニストを経て、二〇〇七年から一〇年十二月まで朝日新聞社主筆。一一年九月から日本再建イニシアティブ財団理事長。慶應義塾大学特別招致教授。国際危機グループ（ICG）執行理事。「内部――ある中国報告」（朝日新聞社）でサントリー学芸賞、八五年度ボーン・上田国際記者賞、「通貨烈」（朝日新聞社）で第六回吉野作造賞、「冷戦後の世界と日本」（講談社）などで第十三回石橋湛山賞、九四年度日本記者クラブ賞、「アジア太平洋フュージョン」（中央公論社）で第八回アジア・太平洋賞大賞、「同明漂流」（岩波書店）で第十一回新潮学芸賞受賞、「ザ・ペニンシュラ・クエスチョン」（朝日新聞社）、「新世界 国々の興亡」（朝日新書）など著書多数。

人名索引件数ランキング

前田敦子が卒業しても AKB48が上位占め!
アベノミクス・安倍晋三がランク再登場

二〇一二年年間ランキン
グの順位に大きな変動はないが、小沢一郎が一位の松田聖子との差を一〇〇件を切る件数まで詰め、ここ数年索引があり増えなかつた三位・長嶋茂雄が国民栄誉賞受賞により四位・雅子妃との件数の差を広げた。

二〇一二年年間ランキン
グの一
位は大島優子。続いて二位に渡辺麻友と昨年に続き AKB48(四位)が上位を占めた。卒業した前田敦子は昨年一位から十八位にダウ
ン。
政界のトップは橋下徹(三位)。自身は大阪府知事から大阪市長へ、「維新の会」は地域政党から国政政党へ、十二月の衆院選では石原慎太郎(十四位)の「太陽の党」と合流し選挙戦に臨んだ。

政治資金規正法違反事件で無罪判決、民主党を離党して新党「国民の生活が第一」を立ち上げ、「日本未来の党」と合流・分裂して「生

約四〇〇誌から採録している大宅社一文庫雑誌記事索引より、人物記事の件数順位を紹介する「人名索引件数ランキング」。すでにホームページでも紹介済みではあるが、総合ランキングについては二〇一三年六月に再度調査した。今回は、二〇一三年上半期の上位二〇名についても紹介する。

総合ランキン
グの順位に大きな変動はないが、小沢一郎が一位の松田聖子との差を一〇〇件を切る件数まで詰め、ここ数年索引があり増えなかつた三位・長嶋茂雄が国民栄誉賞受賞により四位・雅子妃との件数の差を広げた。

二〇一二年年間ランキン
グの一
位は大島優子。続いて二位に渡辺麻友と昨年に続き AKB48(四位)が上位を占めた。卒業した前田敦子は昨年一位から十八位にダウ
ン。
政界のトップは橋下徹(三位)。自身は大阪府知事から大阪市長へ、「維新の会」は地域政党から国政政党へ、十二月の衆院選では石原慎太郎(十四位)の「太陽の党」と合流し選挙戦に臨んだ。

政治資金規正法違反事件で無罪判決、民主党を離党して新党「国民の生活が第一」を立ち上げ、「日本未来の党」と合流・分裂して「生

人名索引総合ランキング

() 内は前年順位、(-) は前年100位以下

1 (1) 松田聖子 (歌手)	4,871 件
2 (2) 小沢一郎 (政治家)	4,777 件
3 (3) 長嶋茂雄 (野球)	3,996 件
4 (4) 雅子皇太子妃	3,557 件
5 (5) 田中角栄 (政治家)	3,383 件
6 (6) 皇太子 (浩宮)	3,250 件
7 (7) 三浦百恵 (歌手, 山口百恵)	2,959 件
8 (9) 昭和天皇	2,665 件
9 (8) 中曾根康弘 (政治家)	2,658 件
10 (10) ビートたけし (タレント)	2,635 件
11 (11) 貴乃花光司 (相撲)	2,586 件
12 (12) 今上天皇	2,512 件
13 (13) 木村拓哉 (S M A P)	2,511 件
14 (16) 石原慎太郎 (政治家, 作家)	2,471 件
15 (14) 松井秀喜 (野球)	2,454 件
16 (15) 宮沢りえ (タレント)	2,345 件
17 (20) イチロー (野球)	2,296 件
18 (17) 中森明菜 (歌手)	2,280 件
19 (18) 清原和博 (野球)	2,257 件
20 (19) 王貞治 (野球)	2,237 件
21 (21) ダイアナ妃 (元イギリス皇太子妃)	2,038 件
22 (22) 田中真紀子 (政治家)	2,037 件
23 (23) 江川卓 (野球)	1,946 件
24 (24) 美空ひばり (歌手)	1,927 件
25 (25) 郷ひろみ (歌手)	1,906 件
26 (26) 美智子皇后	1,871 件
27 (27) 小泉純一郎 (政治家)	1,783 件
28 (29) 原辰徳 (野球)	1,777 件
29 (28) 中田英寿 (サッカー)	1,769 件
30 (30) 竹下登 (政治家)	1,694 件

2012年人名索引ランキング

1 (2) 大島優子 (A K B 4 8)	484 件
2 (5) 渡辺麻友 (A K B 4 8)	473 件
3 (22) 橋下徹 (政治家, 弁護士)	453 件
4 (9) A K B 4 8 (タレント)	416 件
5 (11) 小沢一郎 (政治家)	351 件
6 (13) 大野智 (嵐)	349 件
7 (14) 相葉雅紀 (嵐)	340 件
8 (-) 松本潤 (嵐)	329 件
9 (10) 櫻井翔 (嵐)	309 件
10 (12) 二宮和也 (嵐)	296 件
11 (17) 嵐 (タレント)	235 件
12 (33) ダルビッシュ有 (野球)	177 件
13 (-) 藤ヶ谷太輔 (Kis-My-Ft2)	154 件
14 (47) 石原慎太郎 (政治家, 作家)	151 件
15 (34) 今上天皇	150 件
16 (39) S K E 4 8 (タレント)	149 件
17 (20) 雅子皇太子妃	140 件
18 (1) 前田敦子 (タレント)	136 件
19 (-) 安倍晋三 (政治家)	133 件
20 (25) 木村拓哉 (S M A P)	117 件
21 (31) 吉木りさ (タレント)	116 件
22 (32) 武井咲 (モデル, 女優)	114 件
22 (-) 中島知子 (オセロ)	114 件
24 (6) 指原莉乃 (H K T 4 8)	112 件
24 (-) 山田涼介 (Hey!Say!JUMP)	112 件
26 (23) 関ジャニ8 (タレント)	111 件
27 (-) 香取慎吾 (S M A P)	107 件
28 (-) 知念侑李 (Hey!Say!JUMP)	105 件
29 (55) イチロー (野球)	101 件
30 (50) K i s - M y - F t 2 (タレント)	94 件
30 (75) 山下智久 (タレント)	94 件

活の党」党首となつた小沢一郎は五位。そして内閣総理大臣に返り咲いた安倍晋三が十九位に上り、二〇〇七年の首相辞任以来五年ぶりにランクインした。

二〇一三年上半期ランキングの一位は、初の単独冠番組が好評な相葉雅紀。続いて二位に二宮和也、櫻井翔（三位）、松本潤（四位）と、嵐（七位）のメンバーが上位を独占した。政界のトップは首相復帰後、アベノミクスで日本経済復興を目指す安倍晋三が五位。「总理にしたい男ナンバーワン」と注目されるい小泉進次郎・自民党青年局長は十四位にランクイン。

2013年上半期人名索引ランキング	
1	相葉雅紀（嵐）
2	二宮和也（嵐）
3	櫻井翔（嵐）
4	松本潤（嵐）
5	安倍晋三（政治家）
6	壇蜜（タレント）
7	嵐（タレント）
8	AKB48（タレント）
9	雅子皇子妃
10	大谷翔平（野球）
11	松井秀喜（野球）
12	橋下徹（政治家、弁護士）
13	綾瀬はるか（女優）
14	小泉進次郎（政治家）
15	中村勘三郎18代（歌舞伎）
16	山田涼介（Hey!Say!JUMP）
17	石原慎太郎（政治家、作家）
18	Kis-My-Ft2（タレント）
19	小沢一郎（政治家）
20	中島知子（オセロ）

索引ランキングの件数を算出し

ている雑誌記事索引は、「大宅社

一文庫雑誌記事索引検索Web版

（以下Web OYA-bunko）」でご覧いただけます。

「Web OYA-bunko」は、新聞記事や学術情報など

とは一味違う、世相風俗すなわち

時代の空気につけることの出来る

データベースです。

本年四月にシステムのリニュー

アルを行い、サーバーを強化。さ

らに便利な機能を追加しました。

明治時代から一九八七年までの

「総目録」収録索引をテスト公開

これまで「Web OYA-bunko」

では検索できなかつた

明治時代から一九八七年までの約

百年分、一〇〇万件のデータの無

料公開を始めました。

人物名か項目別で整理されてい

た記事データを検索ワードや執筆

者・発言者で検索したり、検索結

果を雑誌別、発行年月日で絞り込

むことが可能になりました。

データ更新頻度をUP
これまで週一回だったデータ更

新回数を増やし、毎週月・水・金曜日の週三回更新、記事情報をい

ち早く反映できるようになりました。また更新時のサービス停止もなくなりました。

会員版が便利にお安くなりました。

会員版（四月より法人会員版から改称しました）は、これまで検索結果を五〇件ずつ表示していましたが、四月よりデータ表

示前にまずヒット結果の件数を表示。あらかじめ表示件数を一〇件から五〇件の間で選択できるようになりました。

索引表示料金一件二〇円を一八円に値下げしました。月額基本料金五、二五〇円と共に一ヶ月の総表示索引件数にもとづき、従量料金でご請求しております。

オンライン受付複写サービス料金は一枚

三〇〇円を二六〇円に値下げしました。会員版は、選択したデータをオンライン上で複写申込することができます。複写資料はFAXで一ページ＝一枚ずつ送信します。

まずは無料トライアルでお試しを！

「Web OYA-bunko」教育機

関版・公立図書館版・会員版は、索引検索

を一カ月無料でお試しいただけます。ホー

ムページから申込書をダウンロードしてい

ただくか、Eメールでお申込みください。

お問い合わせ先

Web OYA-bunko 管理室

電話 ○三一三三〇三一九九六八

メール weboya.kanri@oya-bunko.or.jp

（件名にトライアル希望と）記入ください）

雑誌図書館・公益財団法人大宅壮一文庫へのご支援のお願い

大宅壮一は生前書籍3万点・雑誌17万点のほか新聞等の資料を収集、資料室のスタッフに分類整理させ評論活動に活用しました。昭和46年、大宅壮一文庫は資料の収集分類を受け継ぎ我が国初の雑誌図書館として活動を開始、以来40年余事業を継続してまいりました。

新聞記事や学術情報とは一味違う、明治から現在まで約150年・74万冊近い所蔵雑誌は、大正・昭和・平成と移りゆく大衆文化や世相風俗すなわち時代の空気に触ることのできる貴重な資料です。

このような実績が認められ内閣府より公益財団法人の認定を受け、平成24年4月1日より移行いたしました。

増加する一方の雑誌資料を収集・整理・保存するための書庫増改築をはじめとする図書館の維持費のほか、雑誌記事検索データベースシステムの構築には、5年ごとに1億円を超える設備投資と年間2千万円余の維持費を必要としています。

何卒、ご理解とご賛同をいただき、格別のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

公益財団法人大宅壮一文庫の事業目的

大宅壮一文庫は、評論家・大宅壮一の収集した資料を継承し整備拡充した雑誌図書館であり、これを広く一般に公開することにより、社会、文化、歴史などの学術及び調査研究に貢献し、もってわが国の社会文化の健全な発展に寄与することを目的としています。

寄付金の使途

寄付金は、雑誌記事索引データベース構築費はじめ雑誌図書館事業の運営費用である「公益目的事業費」に総額の50パーセント、法人の維持運営費である「管理費」に残り50パーセントを使用させていただきます。

寄付のお申込み

公益財団法人大宅壮一文庫 事務局総務課・寄付金係までご連絡下さい。

電話 03-3306-4661 / E-mail kifu@oya-bunko.or.jp

払い込み方法

お申し込み後、寄付申込書と振込手数料当財団負担の振込票をご郵送いたします。

【振込口座】

- ・ゆうちょ銀行〇〇八(ゼロゼロハチ)支店／普通口座 9968661／口座名義 公益財団法人大宅壮一文庫
- ・みずほ銀行烏山支店／普通預金口座 2691049／口座名義 公益財団法人大宅壮一文庫

寄付金に対する税法上の優遇措置

公益認定を受けた財団法人への寄付金支出者は税制上の優遇措置が受けられます。

(1) 寄付者が個人の場合

【国税】

(寄付金額 - 2,000 円) の金額が所得金額から控除されます。

控除額は所得金額の40%が限度となります。

【地方税】

東京都が条例により指定した寄付金として個人住民税の税額控除が受けられます。

※東京都以外にお住まいの方は、自治体により扱いが異なります。

(2) 寄付者が法人の場合

一般寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。

ご寄付を頂きました際には領収書のほか「寄付金受領証明書」と「公益財団法人認定書(写)」をご郵送いたします。当該年の確定申告の際に所轄税務署にご提出下さい。

所得税額から寄付金額を直接控除できる「税額控除」は適用されません。ご了承下さい。

利用料金改定（値下げ）のお知らせ

いつも大宅社一文庫をご利用いただきありがとうございます。

皆様により一層ご活用いただけるよう、本年4月1日より以下の通り料金改定（値下げ）を行いました。（料金は税込表示、会費は寄付金扱いのため消費税対象外）

来館での利用を便利にお安くしました

入館料 入館料 300円（据え置き）
再入館料 100円（4回まで・旧料金200円）
それぞれ20冊まで閲覧できます（改定前10冊まで）
1日最大100冊までご覧いただけます。（改定前50冊まで）
コピー料金 モノクロコピー 1枚 50円（旧料金 60円）
カラーコピー 1枚 120円（旧料金150円）
※会員・学生はさらにお得です

学生利用をさらに割引しました

学割料金 入館料・再入館料各100円（旧料金200円）
それぞれ20冊まで、1日最大100冊まで閲覧可
モノクロコピー 1枚 25円（旧料金 40円）
カラーコピー 1枚 80円（旧料金150円）

会員利用がお得になりました

閲覧冊数 1日150冊まで閲覧できます。（改定前100冊まで）
法人会員 年会費15万円（据え置き）
モノクロコピー 1枚 50円
カラーコピー 1枚 120円
個人会員 年会費5000円（改定前1万円）
モノクロコピー 1枚 40円（個人会員限定割引）
カラーコピー 1枚 100円（　　〃　　）
学生会員 年会費2000円（新設）
モノクロコピー 1枚 20円（学生会員限定割引）
カラーコピー 1枚 60円（　　〃　　）

ご来館いただけない方に

配達サービス（代引き宅配便）
コピー料金 モノクロコピー 1枚 50円（旧料金 90円）
カラーコピー 1枚 120円（旧料金180円）
※来館利用と同額になりました。（会員料金・学割も適用されます）
手数料1回100円（改定前10冊ごとに300円）
※宅急便運賃と代引き手数料をご負担いただきます。
オンライン受付複写サービス（FAX送信）
索引表示料金 1件 18円（旧料金 20円）
複写料金 1枚 260円（旧料金300円）

□越生分館臨時休館のお知らせ□

埼玉県越生分館は、七月十日(火)から九月三日(火)まで夏季休館中です。

【開館時間】

毎週火曜日(祝日休館)午前十一時から午後四時まで開館

(十二時から一時まで昼休み)

東京本館で越生分館所蔵雑誌・書籍を閲覧する場合は、取り寄せに数日かかりますのでご了承下さい。

□閲覧冊数制限についてのお知らせ□

本年四月一日、当館をより一層ご利用いただくため、一日に閲覧できる冊数を左記のように緩和しました。

また利用料金改定(値下げ)も同時にいました。詳しくは七面をご覧下さい。

「一般・学割でご入館の方」入館・再入館のお手続きごとに二〇冊閲覧できます。(改定前一〇冊ずつ)。

入館料 三〇〇円(二〇冊)

学割 一〇〇円(一〇冊)

再入館料 一〇〇円(二〇冊)

※一日最大一〇〇冊まで

閲覧できます

〔会員の方〕一日最大一五〇冊まで閲覧できるようになります。(改定前一〇〇冊まで)。

なお一回の閲覧申込み冊数は六〇冊までとさせてい

ただきました。六〇冊以上閲覧される場合は、お手元の雑誌をご返却のうえ、再度閲覧のお申込みをお願いいたします。

所蔵雑誌は一冊限りです。しばしば別々のお客様からの閲覧希望が重複します。閲覧済みの雑誌を長時間お手元に留め置かれると、他のお客様が閲覧できません。

皆様がスムーズに閲覧できるように協力をお願いいたします。

これまで所蔵雑誌の撮影料金は、撮影カット数分の複写資料代(モノクロコピー料金)をいたしてきましたが、

本年四月一日から所蔵資料を撮影する場合の「撮影料」を設定いたしました。

これまで所蔵雑誌の撮影料金は、撮影料(税込)

スチル撮影 一カット 五〇〇円
ビデオ撮影 一カット 三、〇〇〇円

※右記撮影料の他、入館されるスタッフの人数分の入館料三〇〇円をお支払いただきます。

〔撮影にあたってのご注意〕

資料撮影には、撮影日の予約が必要です(一日一組、午前一〇時~正午、時間厳守でお願いします)。二階閲覧室の指定場所をご利用いただきます。

カメラ・電源等機材はご用意下さい。

著作権法の規定により、撮影箇所と同一ページのコピーはできません。また同一ページのスチル撮影とビデオ撮影はできません。

撮影資料ご使用前に必ず出版社及び

著作権者等の許諾を得て下さい。

□賛助会員(個人) ファクシミリ・サービス利用料金改定(値下げ)□

本年四月一日より個人会費とファクシミリ・サービス手数料を左記通り改定(値下げ)いたしました。

賛助会員(個人) 年会費 五千円(寄付金扱いのため消費税対象外となります)

ファクシミリ・サービス手数料 一件 三〇〇円(税込)

※改定前五〇〇円
※改定前五〇〇円(税込)
※改定前一万円(税込)

※ファクシミリ・サービス資料代(索引検索・記事複写)は三〇〇円(税込)のまま据え置きとなります。

□バックヤード見学ツアーを開催

本年度より館内見学会を開催しております。以前からご要望の多かった書庫内見学や「Web OYA-bunko」の検索体験など、二時間程度のコースをご用意しています。

すでに四月二十九日と七月十五日に開催し、特に初開催の四月には三十七名の皆様にご参加いただきました。

今後も随時開催する予定です。開催

日程と参加募集はホームページで告知

します。ご参加をお待ちしています。

団体での見学のお申し込みは担当・

名の皆様にご参加いただきました。

ありがとうございます。

この他に各雑誌の出版元から、定期的にご寄贈いただいております。

この他に各雑誌の出版元から、定期的にご寄贈いただいております。

この他に各雑誌の出版元から、定期的にご寄贈いただいております。

この他に各雑誌の出版元から、定期的にご寄贈いただいております。

この他に各雑誌の出版元から、定期的にご寄贈いただいております。

緑豊かな鎌倉・瑞泉寺において、ご親族による大宅昌夫人七回忌の内輪の法要が當ました。

昌夫人は稀代の評論家・大宅壯一念願の「民衆のライブラリー」構想実現のために蔵書二十万冊と書庫を寄付して文庫創設の礎とし、自らも資金を拠出し運営基金集めに奔走して、一九七一年五月十七日に財団法人を設立、一般公開を達成した。

二〇〇七年五月二十四日、一〇〇歳で永眠するまで終生理事長として雑誌図書館の整備拡充と普及に尽力した。

大宅壯一、長男歩と共に眠る墓前に花を供え、親族の皆様といっしょに手を合わせて文庫事務局の一員として創立の志継承と発展を誓った。

二〇〇七年五月二十四日、一〇〇歳で永眠するまで終生理事長として雑誌図書館の整備拡充と普及に尽力した。

大宅壯一、長男歩と共に眠る墓前に花を供え、親族の皆様といっしょに手を合わせて文庫事務局の一員として創立の志継承と発展を誓った。